

高等学校「家庭総合」における保育体験学習の効果と課題

Effects and Assignments concerning Experience in Early Childhood Education and care in
Senior High School Home Economics

尾城 千鶴*

Chizuru OJIRO

吉川 はる奈**

Haruna YOSHIKAWA

1 問題と目的

平成20年度の合計特殊出生率は1.37と報告され、一方で児童虐待の問題や家庭の教育力低下など子どもの発達をめぐる問題は深刻な状況である。このような現代の状況を背景に、家庭科を通して「親準備性」や「育児性」を育成する必要性も強調されるようになった。家族の形態が多様に変化し、家族を取り巻く地域社会と家庭との関係も希薄になっており、学校教育における保育学習の取り組みはますます重要になると言われる。家庭科学習指導要領の保育に関する領域では、すべての生徒が乳幼児と直接触れ合う体験を通して学べるように工夫することが求められている。

乳幼児と触れ合う経験を持たない高校生の理由として、「兄弟がいない」「近くに子どもがいない」などがあげられる。高校の保育体験で初めて幼児と触れ合ったという生徒も少なくない。保育体験学習を行うことで、生徒の子どもへの興味関心が高まり、子どもに対して好印象を持つようになる等効果は大きい。しかし「近くに幼稚園がない」「クラス数が多すぎて連れていけない」「授業時間数の関係から保育体験学習の時間が取れない」「職員間の理解が得られない」「生徒指導に問題があり、生徒を校外へ連れていける状況ではない」「相手先に迷惑をかける恐れがある」「家庭科教師の負担が多すぎる」などの課題があり、保育体験学習を実施できないケースも多い。また家庭基礎（2単位）を必修とする学校も増えつつある中、意義のあることだとわかっているにもかかわらず、ますます保育体験学習を取り入れづらい現状となっている。今後、どのような形で保育体験学習を取り入れていくのが、無理なく効果のある学習となるのか検討していく必要がある。

現在、学校によって差はあるが、家庭総合の授業の中で扱う保育分野の時間は、被服や食物分野に比べて少ない。高校の保育体験学習は、実施形態も様々で、家庭科の「家庭総合」または「家庭基礎」や「発達と保育」などの科目や教科以外の「総合学習」、「ボランティア活動」、「学校家庭クラブ」、「職業体験」等で実施されている。どのような形態で行うかによっても、生徒の目的意識、学習効果が異なってくる。

県立K高校では、平成14年度から選択科目「発達と保育」において幼稚園実習を実施している。さらに平成20年度からは、2年生全員に「家庭総合」で幼稚園実習を行うようになった。高校側は、実習を行うことで生徒に大きな効果をもたらすことの期待感とともに「多様な生徒を外部の機関で実習させること」への不安感は大きく、実施には課題も多い。しかし「発達と保育」を選択した保育に興味のある生徒を対象にした実習だけではなく、すべての生徒に実施している。

* 埼玉県長期研修生・埼玉県立栗橋高校

** 埼玉大学教育学部家政教育講座

本稿では、生徒全員に保育体験学習を実施し、その実習前後に生徒が記述した内容を分類し、整理することで、生徒全員を対象にした保育体験学習が生徒にもたらす効果について明らかにしたい。

2 方法

県立K高校2年生全員（生徒約150名）を対象に家庭総合の授業の時間を使って、保育体験学習を行った。実習先は、高校から徒歩5分のところにある私立幼稚園で、年少2クラス、年中2クラス、年長3クラスで約200名の園児が在籍している。

事前に家庭科の教員が保育体験学習の打ち合わせを幼稚園の先生方と行った。また授業では、子どもの発達についての学習、訪問する際の態度、心構え、服装や言葉遣い、挨拶など外部の機関へ出ていくための心構えや子どもとの接し方について学習したが、子どもの理解については、時間不足もありやや不十分であった。事前に全員がイラストを書いた名札を作っていた。実習後は、生徒全員に感想文を書いてもらい、感想をまとめたものを園にも渡した。



図1 朝の会の様子

（高校の目的）

幼稚園を訪問し、子どもの発達と保育について理解するとともに現場実習をととして保育者の心構えを知る。

（幼稚園の目的）

幼児の命に触れ、生活を共にすることで、その存在の愛おしさや自分の存在の意味を感じてもらいたい。この体験を通して高校生だけでなく、子どもたちも保育者も育みあい、子どもたちが生活する未来がよりよいものになるようにしていきたい。

（日程）

学年	クラス	時間帯	時期
2年生	6クラス	①11:15～13:15	10月下旬～11月下旬
		②13:15～14:20	

家庭総合の授業は、4時間目または5時間目のため、授業時間と昼食および昼休みを使う①あるいは②の時間帯を、6クラスが1カ月かけて順次、保育体験学習を行った。4時間目のクラスは、お弁当を園に持参し、園児と一緒に食べた。保育体験実習中は、担当教員も生徒と一緒に実習に加わり、生徒の実習の様子、取り組み方、園児の様子などを観察した。



図2 給食の時間

3 結果

保育体験学習後に生徒全員が記入した感想文を分類した。感想はできる限り感じたことを具体的に記述してもらうために自由記述とした。記述内容から、全455事例を6つに分類することができた。「生徒自身の気づき」「幼児の特徴」「次への期待」「他者の働きかけへの気づき」「園についての気づき」「その他」である。

表1 保育体験学習の記述の分類

分類	項目	記述例
生徒自身の 気づき (166事例)	楽しい(71)	子どもたちとたくさん触れ合えて楽しかった。
	勉強になった(46)	子どもたちのさまざまな場面を見ることができてとても勉強になった。
	不安(23)	子どもたちとちゃんと話せるか不安だった。
	苦勞・大変(11)	子どもたちは一度に話しかけてくるので、聞き取るのに大変だった。
	昔を思い出した(7)	10年ほど前の自分もああう感じたのかなああと違う視点で見られたことが面白かった。
	中学校時の体験の比較(4)	中学校の実習の時よりも、今回のほうがうまく子どもたちと接することができた。
幼児の特徴 の気づき (127事例)	子どもが好きになった(4)	幼稚園に行って、子どもが好きになった。
	子どもの様子(43)	元気で明るく素直でとてもよい子どもたちだった。かわいかった。
	遊びの特徴(33)	鉄棒や鬼ごっこをしたり、滑り台で遊んだ。
	子どもからの働きかけ(18)	最初は子どもたちとうまく遊べるか不安だったが、子どもたちのほうから話しかけてきてくれて、うれしかった。
	驚き(15)	小さくても力が強くてびっくりした。きちんと挨拶ができていて驚いた。
	うれしい(11)	みんな元気にあいさつをしてくれてうれしかった。
	大変さ(5)	子どもたちが実際、何を言っているかわからなくて会話が難しかった。
次への期待 (90事例)	自分との比較(2)	話すこと、遊びすべてが私たちとは違っていた。
	実習への興味関心(38)	また行く機会があれば保育実習をやりたい。
	将来への希望(21)	自分に将来子どもができたときに役立てたいと思った。
	体験学習への意見(19)	時間が短かったのが残念だった。今度は1日行ってみたい。
	職業(幼稚園の先生)(7)	保育実習を通して、将来のことを少し考え、できたら幼稚園の先生になりたいと思った。
他者の働き かけへの 気づき (28事例)	子どもの接し方(5)	これから小さい子どもに会って、困っていたら話しかけて助けてあげようと思った。
	先生について(25)	先生方の子どもたちに対する指導は、大変素晴らしいと思った。子どもたち1人1人に目を向けて指導する姿に感動した。
園について の気づき (10事例)	クラスメイトについて(3)	クラスメイトが園児と楽しく遊んでいるという姿が見られてよかった。
	保育の仕事(8)	さまざまな能力を問われる職業だと思った。
	園の施設(1)	私が行っていた幼稚園は遊具が少なかったので、遊具がたくさんあってうらやましかった。
その他 (34事例)	その他(1)	子どもたちを預かることの責任感を学ぶことができた。
	園への感謝(34)	実習をさせていただき本当にありがとうございました。

(1) 生徒自身の気づき

最も多かったのが「生徒自身の気づき」で166事例あった。そのうち「楽しい」という項目が71事例あり、大部分の生徒が保育体験学習は「楽しい」という思いを持っており、子どもたちと話したり、遊んだりすることが好きである。「嫌だ」や「つまらない」という否定的な感想は一つもなかった。事前学習時の教室での様子は、「幼稚園に行きたい」という多くの声の中で「どうして行くのか」や「どうしても行きたくない」や「小さい子は苦手だから不安だ」という声も少なくなかった。実習中は、外で鬼ごっこをして遊んだり、部屋の中で積木をしたり、子どもたちと遊ぶことそのものが楽しかったようである。「勉強になった」という項目では、「小さい子とどう接したらよいか学べてよかった」や「子どもの行動が間近に見られてよかった」「子どもの考え方が学べた」など、子どものいろいろな行動場面を見ることで、今まで知らなかったことや改めて気付かされたことや新たな発見をしている。

保育体験学習に行く前の気持ちとして「不安」に関する記述をした感想は23事例あった。実習に行く前の生徒の様子は、実際にはいつもと同じ様子で特に不安な顔は見せてはいなかったが、感想から不安な気持ちが表れていた。「子どもたちとうまく話せるか不安だった」や「最初は子どもが苦手で不安だった」、「子どもとどう接していいか戸惑った」、「最初はいつトラブルが起きてしまうか、いつけがをしてしまうか、不安だった」などというような記述があった。これは、少子化や兄弟が少ないということや、近所に子どもがいないというような理由で、実際に幼児と触れ合う経験が不足しているため、実習に不安を抱いているということが考えられる。不安の記述の他にも「あまり行きたくない」や「面倒くさい」などといった感想があった。保育体験学習で子どもたちと触れ合うなかで、「苦労した」や「大変だった」という記述は、11事例あった。「子どもたちが一度に話しかけてくるので聞き取るのに大変だった」や「子どもたちの目線で話したり、走ったりするのは大変だった」という感想もあり、子どもとの接触の経験が少ないことから交流するにあたって苦労していることが分かる。事前に子どもについての知識や理解をもっと十分に学習しておく必要がある。また、「昔の自分を見るような時間だった」や「10年ほど前の自分もああいう感じだったのかなあと考えた」や「自分の小さかったことを思い出して、人の成長はすごいと思った」など自分の幼少期への思いを記述している例もある。

中学校時の保育体験学習と比較している事例もあり、自分自身の成長を認識し、「中学校の時よりもうまく子どもと接することができた」と記述している。

「この実習がきっかけで子どもが大好きになった」という記述が4事例あげられており、保育体験を通して子どもが好きになり、子どもともっと触れ合ってみたいという思いになったということは、1時間という短い実習時間ではあったが保育体験実習の大きな成果といえる。その他、「幼稚園実習で得たものは大きかった」、「貴重な体験ができた」などの記述があり、どの生徒も充実した時間となったようだ。

(2) 幼児の特徴

次に多かったのが、「幼児の特徴」で127事例であった。「子どもの様子」について記述しているものが一番多く、43事例あげられる。生徒は短い時間の中でも子どものさまざまな行動を観察していることがわかる。「かわいかった」という記述が最も多く、「素直」「元気」「明るい」などす

べて子どもに対して好意的な感想である。次に多かったのが「遊びの特徴」についての記述である。「鉄棒やすべり台をやって遊んだ」「おにごっこをした」「お花つみをした」「砂場で遊んだ」など実際に子どもたちと遊ぶことにより、子どもがどんな遊びで遊んでいるかを理解することができたようだ。「さつまいも掘り」や「玉入れ」など幼稚園側が企画してくれた遊びもあった。

子どもの行動の中でも「驚き」についての記述が15事例あった。「小さくても力が強くてびっくりした」、「すごいパワーがあると思った」、「想像をはるかに超える学習力があると思った」、「きちんと挨拶ができていて、驚いた」など自分が考えていた以上の力が子どもにあることが、実際の体験をとおしてわかったようだ。その反面、「体も手も小さくて小さい段差で転んでしまったり、守らなくちゃいけない存在だと思った」という気づきもあった。「うれしい」という項目では、11事例あり、「子どもたちは笑顔いっぱいでもううれしくなった」など子どもとの交流の中で、喜びも得ている。

「大変さ」の項目は、5事例あった。「交流してみて、実際子どもが何を言っているのかわからず、会話が難しかった」という感想があった。また、「体力がついていけず、大変だった」という記述もあり、子どもと遊ぶのにかなりの体力も必要だと感じたようだ。「話すこと、遊びがすべて私たちと違っていた」というように高校生である自分たちと幼稚園生とのことばや遊び、行動などを比較している感想もあった。



図3 剣の製作



図4 外で一緒に折り紙



図5 製作活動の時間

(3) 次への期待

「次への期待」は、90事例であった。「実習への興味感心」についてが最も多く、38事例あった。「また行く機会があれば保育体験学習をやりたい」、「また、幼稚園へ行って子どもたちと遊びたい」という感想があり、今回の保育体験学習を通してもっと子どもと触れ合いたい、という気持ちを持っている。「将来への希望」の項目は、21事例あり、「自分に将来子どもができたときに、役立てたい」、「私も将来、人から感謝される人になりたい」など実習を通して自分の将来について考えるきっかけにもなっていることがわかる。今回の保育体験学習は1時間という短い時間だったので、今度はもっと長い時間、たくさん子どもたちと交流したいというさらに内容が深い交流を希望している生徒が多くいたことが「体験学習への意見」の項目からわかることができる。

「職業」についての項目では、7事例の記述があり、「できれば、幼稚園の先生になりたいと思うようになった」や「幼稚園の先生に少し興味を持った」という感想があり、将来の進路について考えるきっかけにもなっている。「子どもとの接し方」の項目では5事例の記述がある。「もし、どこかで泣いている子どもがいたら声をかけてあげたいと思った」や「これから小さい子どもに会って、困っていたら話しかけて助けてあげようと思った」など他者への思いやりの気持ちも

表れている。これは、幼稚園側の強い願いでもあり、その願いも着実に生徒へ伝わりつつあるようだ。

「これから子どもに対する態度を考えていきたいと思った」という記述もあり、子どもの接し方を再認識するよい機会ともなっている。



図6 子どもたちと遊ぶ高校生



図7 帰りのあいさつ

(4) 他者の働きかけについての気づき

「他者の働きかけへの気づき」は、28事例あった。そのうち幼稚園の先生についての記述が25事例あった。「先生方の子どもたちに対する指導は、大変素晴らしいと思った」や「先生方は、いろいろなことにおいて素晴らしい見本となった。」、「幼稚園の先生の体力はすごいなと思った」、「一度にたくさんの子どもの話を聞き、対応しているのがすごかった」というように、実習に見た先生の子どもに対する対応や行動に、生徒は驚きや感想などさまざまな感情を持ったことがわかる。

自分で実際に子どもたちと交流することで子どもと接することの大変さ、難しさを感じた分、先生方の保育する姿が素晴らしいという感想を持っているようだ。また先生や子どもたちの姿だけでなく、毎日一緒に高校生活を送っているクラスメイトの姿についても観察をしている。「クラスメイトが園児と楽しく遊んでいるという姿が見られてよかった」、「友達の新たな一面を見ることができた」などクラスメイトについていろいろしていた。

(5) 園についての気づき

「園についての気づき」は、10事例であった。短い実習時間だったため、実習に慣れない生徒は、子どもとの交流で精一杯で、あまり園の施設や教室の掲示物、置いてあるものに観察する余裕がなかったようだ。

「保育」という仕事についての記述で、「さまざまな能力を問われる職業だと思った」や「あんなに多くの子どもたちを指導するのは大変だと思った。」などがあげてあった。実習を通して、幼稚園の先生という職業について観察していた。

園の施設については、「自分の幼稚園の時とは違って、遊具がたくさんあってうらやましいと思った」という記述があった。また、他には、子どもたちを預かる大変さ、責任感などを、感じ取っていた。

4 考察

(1) 高校生の保育体験学習の特徴

今回の保育体験学習は、幼稚園側の「将来子どもを育てる立場である高校生に対しての保育教育に手助けしたいという思い、高校生が少しでも園児に興味や理解を持つ機会を作ってほしい、そして自分自身を見つめ直す機会にしてほしい」という強い願いが高校生全員の保育体験学習を実現させ、そして結果として効果の大きい実習となった。

このように幼稚園による、高校生が保育体験学習を行うことへの積極的理解と支えにより成り立っている。幼稚園側のあたたかい受け入れ体制、全身体験することでさまざまな生徒（保育の興味のない生徒）を含むことへの理解に支えられているといえる。幼稚園側の「子どもに関心がない生徒こそそらせてください。」という言葉は、実習を実現させる大きな支えになった。

県立K高校は7年前から3年生の選択授業「発達と保育」で幼稚園実習を取り入れてきた。平成20年度から2年生全員が、「家庭総合」の授業で保育体験学習を取り入れ生徒全員が体験できる。選択「発達と保育」では保育が勉強したい、幼稚園で実習をしてみたいなど保育に興味関心のある生徒であるが、「家庭総合」の場合では、必ずしも保育に興味のある生徒ではなく、「子どもが苦手」「子どもと接するのは不安だ」「面倒くさい」と思っている生徒もいる。日常生活の中で子どもと関わることの少ない生徒も多く、子どもと接するのに不安な気持ちでいることが感想からもわかる。幼稚園へ行っても、はじめは、多くの生徒が硬い表情でどのように接していいかわからず、戸惑っている様子である。このことは、生徒の行動からもわかるが、「子どもたちと遊ぶのは初めてで、最初は子ども相手でも人見知りをしてしまった。」というように感想文からもわかる。また、幼稚園の先生の話からも高校生は、保育室に入ってきたとき、あいさつの声が小さかったり、元気がなかったり、という様子であることが分かる。子どもたちのほうからたくさん話しかけられ、「遊ぼう」と手をつないで来たり、おんぶをしてくたりするうちに生徒の顔の表情もだんだん柔らかくなり、最後には、生き生きとした笑顔になっているという姿を見た。1時間という短い時間の中でも、子どもたちと触れ合うことにより、子どもに対する興味、関心が増し、純粋に子どもと遊ぶ楽しさや子どもを育てる大変さなどをさまざまな場面で感じ取っていることが分かる。また、自分自身の過去を振り返り、自分の生き方を考える良い機会にもなり、自分が成長してきた過程で、自分を取り巻く家族、先生、地域の方への感謝の気持ちに気づかされることもある。そして、今まで気づかなかった自分を発見できる。現在の生徒の現状として、乳幼児の交流の経験は乏しく、子どもについての理解を持ちにくい状況であり、なお一層、学校で乳幼児と触れ合えるきっかけを作る必要があるように感じる。保育体験実習後は、ほとんどの生徒が子どもに対して好意的な感情を持ち、幼児への気づきだけでなく自分、幼稚園の先生や友人関係、さらには、その背景にある家族など様々な人間関係を目を向けることができる。そして、教師自身も生徒と子どもが触れ合う姿を見ることによって、普段、高校では見ることのできない表情を見ることができ、新たな発見や驚きがある。今まで型にはめて生徒を見ていたことに気づかされる。そして、生徒が今まで親や兄弟、先生、友人など様々な人々と関わって生きてきたことに気づき、感謝の気持ちが芽生えるということはかけがえのない効果である。実習から帰るころには、1人1人の表情は、幼稚園の実習の最初のころと全く違ってとても生き生きとし、帰る頃には、充実した顔つきに変化している。そして、今度はもっと子どもたちと触れ合ってみたい、もっと

幼稚園にいたいという気持ちに変化していることは、明らかに体験実習によって生徒の心に変化していることがわかる。感想文にも「今回、幼稚園に行って子どもが好きになった」という感想があるように行く前と比べて、子どもに対する感情が変化している生徒がいることは、大きな成果である。子どもの純粋な心に触れることで、他者を思いやる気持ちが育っている。

高校生だけでなく幼児の心も変化していると幼稚園から報告された。子どもたちは高校生が来ることをとても楽しみにしているようで、何回か高校生が来ていると、来ない日には「今日は、来ないのかな？」とか高校生が来たら、「鬼ごっこがしたい。」「一緒に遊びたい」などと言って、来るのをとても楽しみにしているそうである。また、高校生と接することで、「大きくなったら、こんなことをやってみたい」とか、「こんなふうになりたい」という気持ちを持つきっかけにもなっている。高校生の保育学習だけではなく、子ども中心の環境である幼稚園という場で、他者とのかわりから思いやりの心を育み、世代の違う高校生と幼児がお互いを理解しあい、人の心を豊かにしていくという大切なものを得ることができる貴重な体験であるといえる。

(2) 中学生の保育体験学習との違いについて

中学生での保育体験学習では、特に自分の幼少時代を振り返り、今まで育てて来てくれた親や先生をはじめ自分のまわりの人々に自分は支えられて生きてきたことを知り、思春期の不安定な心が豊かになるという効果が指摘されている。

高校生に比べ中学生の記述には、子どもの特徴、具体的な遊びの姿に気づいたという記述が多い。一方、高校生は心身ともに成長していくことから、保育体験学習を通して、自分の将来について考えていくきっかけになる。また将来、自分が親の立場になった時のことを具体的に思い描き、「将来、こういう親になりたい。」とか「子どもにこう接したい」など考えるようになっていく。幼稚園の先生という職業を実際、自分の目でみることで「幼稚園の先生になりたい」という思いをもつ生徒もいるが、幼稚園の先生に関わらず、自分の将来の職業についてさまざまな角度で考え始めるという生徒もいる。中学生では、子どもの立場での視点で考えているのに対し、高校生では、親の立場になった時のことや、子どもを育てるといった視点で考えていることが多いといえる。

(3) 次への期待

記述のなかで多くみられたのが「次への期待」という項目であった。多くの生徒が事前に不安を抱いた保育体験実習であるが、自分が思うよりうまく子どもたちと接することができた結果、もっと子どもたちと遊びたい、もっと子どもについて知りたいというようにさらに内容の充実した実習を求めている。また「将来、自分は人の役に立てる人になりたい」という将来への思いについての感想や「実習後、幼稚園の先生に興味を持った」など将来の夢や職業などへの思いへと広がっている。子どもたちの接し方の認識も変化し、他にも自分の親や子育て中の親への認識も変化している。

本稿では、紙面の都合上、詳細には、触れることができないが、この実習を行った2年生が3年生へ進級し、2年生で保育体験を経験し、3年生でさらに保育を深く勉強してみたいという生徒が選択科目である「発達と保育」を選択した。例年1講座だが、該当学年は選択者が増え、2

講座の開講となった。6月と11月の2回、幼稚園実習を行った。6月の実習は、半日実習、11月の実習は、1日実習である。6月の事前の生徒のアンケートからほとんどの生徒が、幼稚園実習がとても楽しみであると答えている。不安だと答えた生徒はごくわずかであった。昨年の2年生時の事前の記述は不安を訴えるものが多かったが、保育実習を体験をすることで、不安だという気持ちがなくなり、楽しみという気持ちに変化していることは、たとえ短時間でも実際に体験することの重要性を表している。また3年生になると2年生の感想の記述で多かった「先生についての気づき」が減り、「生徒自身の気づき」が増え、自分自身についていろいろな思いを持ち、自分自身を分析していくという点で、2年生の時とは違った面が出てきている。保育体験学習は、幼児や他者へのかかわりにおいて、生徒自身に自信を持たせる働きも持っていることが分かる。保育学習について今まであまり関心を持たなかった生徒が、もっといろいろなことを知りたいと子どもについて勉強してみたいというように、学習意欲が向上していることが分かる。子どもと触れ合う経験の少なさからくる不安な気持ちが、子どもと触れ合う経験をとおして楽しい気持ちに変化し、うまく子どもたちと触れ合えた経験が、生徒の自信につながったというプロセスは、保育以外の事柄においても影響し、いろいろなことへ挑戦してみたいという意欲や自信につながっていると思われる。少なからず生徒1人1人の感じ方が違うにしても生徒の心が変化していることは、明らかである。人と人とのつながりが希薄な現代社会だからこそ、このような触れ合う体験は、子どもにとっても、高校生にとっても大切なものであると感じる。体験実習を通して生徒が感じたさまざまな気づきや子どもたちとうまく交流できたことにより持った自信は、保育体験学習の大きな収穫であるといえる。このように1時間という短い関わりの中でも子どもについて具体的に見聞きし、自分の存在を捉え直し、将来の生き方を考え様々なことを学んでいるといえよう。

(4) 保育体験学習の事前、事後の学習のあり方の問題

事前学習ではカリキュラムや施設など幼稚園の概要の理解や子どもの適切な接し方、安全面の注意点、訪問する際の態度、服装、言葉づかい、挨拶についての心構えを学習する。その他、おもちゃや絵本の製作などがあげられる。また高校と幼稚園との事前の細かい打ち合わせが重要になる。充実した実習を行うためには、まずは、担当する教師側が保育体験学習の場となる幼稚園や子どもたちの理解や知識をさらに深めていく必要性を感じた。子どもについて理解し、幼稚園を知ることで、より効果的な保育学習ができる。そのためには、事前に生徒を連れなくて、教師自身がまずは、幼稚園で子どもたちと一緒にすごしてみることが重要であることに思える。教師自身が幼稚園を理解していないと、事前に生徒への的確な指導ができず、的の外れた事前準備となってしまう恐れがある。この点については現在の状況は、少し不十分であると思われる。またこのような事前学習の不足が、実習前に生徒が不安を抱く原因にもなっていることも予想される。たとえば、授業の時間の多くを玩具の製作に費やすことが目立つ。玩具を製作し持参することにとらわれてしまい、子どもについての理解が不十分になってしまう。物を製作することのみで終わることのない、子どもの理解の学習を中心とした授業の展開が大切である。だからこそ、まずは教師が子どもについての理解を深めたうえで、生徒に事前指導を行うことで、生徒も充実した内容の深まった保育体験学習ができるはずだ。そして事後指導としてやりっぱなしにならない

いように事後のまとめをし、生徒に感想や記録を書かせたり、お互いに意見を出し合いなど、次の学習につなぎ発展させることが必要である。また実習後は、高校と幼稚園との話し合いを持つことも重要である。

5 今後の課題

家庭科の授業で、保育体験学習を行う場合、家庭科は、調理実習や被服実習の準備や片付けなどにも時間がとられ、それに保育実習が加わると、現実的にはかなり家庭科教師に負担がかかってしまうこともあり、教科の先生1人の力で実施するのは、かなりの困難を伴う。家庭科の教員同士が協力することや、学校全体で取り組み、他の教科の教員の協力が必要となってくる。

保育体験学習は実習先の幼稚園の協力により支えられている。今回の保育体験学習は「子どもも高校生もこの体験学習をとおして「育ちあう心」を育て、互いに成長してほしい」という両者の強い願いが支えとなっている。幼稚園と高校との主体的な関係作りを大切にしながら、この取り組みを続けていきたい。

引用・参考文献

- ・ 中嶋明子、砂上史子、日景弥生、盛玲子：高校家庭科における保育体験学習者の意識変容（第1報）保育体験学習者の意識変容過程の構図化 日本家庭科教育学会誌 46-4351-360 (2004)
- ・ 砂上史子、日景弥生、中嶋明子、盛玲子：高校家庭科における保育体験学習の意識変容（第2報） 日本家庭科教育学会誌 48-1 10-21 (2005)
- ・ 渡貫由季子、武藤安子：高校生における保育観の形成とそれに影響を及ぼす要因 自我発達の関連で日本家庭学会誌 55(2) 135-144 (2004)
- ・ 藤後悦子：高校の「保育」体験学習を通しての子どものイメージの変化 家庭科教育研究所紀要 23 108-118 (2001)
- ・ 室雅子：中学、高校での乳幼児接触体験と保育教育の果たす役割 家庭科教育研究所紀要 21 75-85 (1999)
- ・ 吉川はる奈、金子京子：中学生と大学生を対象にした保育学習における実践的研究 埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要 6 171-179 (2007)
- ・ 伊藤葉子：中・高校生の家庭科の保育体験学習の教育的課題に関する検討 日本家政学会誌 58 NO. 6 315-326 (2007)